

## 宇都宮空襲を体験して

井上富子 鹿沼市

### ●提灯行列でみんなが浮かれた

現在は鹿沼市に住んでおりますが、宇都宮の宇都高の近くに生まれ育ちました。女4人、男2人の子とも両親と8人家族で、私はいちばん上の長女でした。小学校の5年生の時から女学校時代まで、戦争のさなかにありましたが、もう長い時間が経っているので記憶が薄れているところはお許しくださいと思います。

通っていた西原小学校は、その時代は国民学校といわれ、大東亜戦争（太平洋戦争）がはじまった昭和16年12月8日は小学校5年生でした。日本軍がハワイの真珠湾に攻撃を仕掛け、米英に宣戦布告したのです。はじめのうちは戦果が上々で、町内会から提灯行列に参加してくださいというので、提灯（ちょうちん）を預かって、夜、宇都宮の町の中を「ばんざい、ばんざい」と提灯行列した思い出があります。

しかし、やがて本土空襲が多くなり、宇都宮は昭和20年2月から8月までの間に8回くらいの空襲がありました。

### ●最後の空襲

20年の7月12日の晩のことでした。長雨が2、3日続いていて、



その夜も肌寒く、雨がしとしと降っていました。夜中の11時19分から始まった空襲は翌13日の1時39分まで、2時間20分間続きました。アメリカの爆撃機B29が115機やってきて、約10万個の焼夷弾を市内に投下していききました。裁判所の前から材木町通りあたりに焼夷弾が落ち、火の手が上がって真昼間のように明るくなりました。あちこちから飛行機の音、焼夷弾の爆発する音も聞こえ、すさまじい戦場のようでした。

「防空壕の中にいなさい」と父から命じられたのですが、弟や妹を防空壕に残し、父親と私が防空壕から出て様子を見ました。うちの前が大きな通りだったので、人々が逃げ惑うのが見えました。雨が降っていることもあって、子どもを真ん中に挟んで親たちが布団をかぶったり、兄弟でかぶったりして逃げていきました。親を呼ぶ声、子どもを呼ぶ声が飛行機の爆音や破裂する音と混じって、まるで生き地獄のような状態でした。現在の中央公園（元は専売公社があった）から文化センターの交差点辺りへ、それから鹿沼のほうへ逃げていく。赤ちゃんを負ふい、両方に幼子の手を引く人、自転車に子どもを乗せて押していく人……大八車に荷物を載せ、年寄りを乗せ、そこへ布団をかぶせて。ところが混雑していて全然前に進まないんです。悲鳴が聞こえたりして、本当に悲惨な状況

でした。

私は父親にすがり付き、泣きながらその様子を見ました。「まだうちは焼けてないんだから、弱音を吐いちゃいけない」と何回も励まされた。そして避難していく人たちに、少しでも声をかけて何か言ってやるようにと、父親から言われたことが今でも頭に残っています。

日本の住宅というのは木と紙でできているから焼夷弾を作ったのだそうです。直径8センチ、長さ60センチ、6角形の筒で、鉄板の厚さ1ミリ。この中には油脂爆弾が入っており、これを勢いよく落とすと破裂して、人体や家屋に火が付いた。全身がやけどのような状態になって、宇都宮駅の近くの田川に飛び込んだという人も大勢いました。

### ●焼野原に重なる死体

次の日、父が私を連れ、知人の家がどうなっているのか気になるので出かけました。材木町通りからちよつと入った所でしたが、私はがまがでできず、泣きながら「帰ろう」と言いました。道という道に、焼野原のあちこちに、死体が重なっている。そこへ怪我をして、やけどをしている子どもたち、大人たちがふさがるようにしている。近所の方や町内関係の方が一生懸命世話をしていました。夏ですから日差しが強く、腐敗した臭いと焼け跡のくすぶっている臭い、遺体の臭いと、けが人の苦しむ声がいやお

うなしに襲いかかってきました。自分の家は罹災はしなかったけれど、すぐ身の周りではひどい状況で、幼いながらもつらく、戦争は嫌だということを感じました。

空襲の次の日、学校の記念館に臨時要員のよな形で召集されました。そこには死体が運ばれており、やけどをした人たちがたくさんいて、うめき声でいっぱいになっていました。お手伝いということで学校の近くの生徒が出向いたのですが、私たちには人が介抱するほどのお手伝いはできません。包帯なども十分なかったのですが、よれよれになったままです。それでその包帯を手で丸める作業をしました。それを届けに行ったときに、けがをした人が、水がほしいと言ったりして苦しむ様子などを目の当たりにして、毎夜、毎夜、夢を見るようなことがたくさんありました。今でもそのときの状況を思い出すと胸がいっぱいになり、辛かったこともよみがえってくるくらいです。

### ●市内の被害状況

アメリカ軍は事前に相当偵察をしていて、空襲をするめばしいところを決めておいたということも聞きました。宇都宮の市内では、学校、市役所、一般の住宅、郵便局、駅2か所、病院、お寺、映画館など、だいたい町の65%ぐらいが焼かれてしまいました。1万7400ぐらいの

世帯があつたうち1万600あまりが罹災しました。死者が620名、その中に児童生徒が73名ぐらい含まれていたそうです。負傷者が1200〜3000名ぐらい。この中には鹿沼の方も含まれているそうです。現在は宇学、文星芸術大学は戦時中は兵舎があつたので、そこを狙つたということです。南にさがつて現在は宇都宮文化会館になっていますが、ここは以前は高塚屋敷と言つて、刑務所があり、広い敷地でした。現在の富士重工は戦時中は中島飛行場と呼ばれていました。中心部の大いちは空襲で焼け焦げたのだそうですが、それでも植物の復活はたくましく、いま、元気で育つていて樹齢400年を過ぎていているそうです。中心部の二荒山神社の大鳥居は消滅し、本殿は一部残り、手直しをして現在に至つていているそうです。

### ●持っていたかれた自転車

さて、空襲前の戦時中のことですが、私の家の門は鉄扉でした。銃や鉄砲の弾を作るために家庭の金属回収令というのができ、うちの扉もねじを外して、回収をされてしまった。門がなくなつちやつたのです。泥棒が入るから嫌だとか何とか言つて、私たち子どもはさがり付きましたが、「戦争のためだ、戦争に勝つまでは我慢しなきゃならない。寄付するのは当たり前なんだよ」と親に説得された。それともう一つ。子供用に中古の自転車をやつと買つてもらつ

ていたのです。それもやはり回収されてしまいました。それにさがり付いてわーわー泣きながら、引きづられても離さないでいたのですが、「戦争のためなんだから我慢しろ、あとでまた買つてやるから」とだまされました。本当に戦争は嫌です、常々そう思います。

### ●その頃の暮らしがまんの日

衣食住についてですが、なんでも不足していません。「白いご飯が食べたい」と言おうものなら、「そんなことは言うな、スパイがいるからおつかないぞ」などと父親に怒られました。なんでも配給制で、配給券がなくてはお米ももらえない。ほとんどいも類を食べていました。親が作ってくれたお弁当を渡されて、ちよつと覗いてみると、ご飯が入っているのです、今日のお昼はよかつたなあ、なんて思っていると、下は芋で上にご飯がうすくそろつと乗っている。おかずは梅干し。日の丸弁当です。

「つらいけど、みんなで我慢するんだよ」と、食事の時はいつも親からそういわれて、我慢に我慢をしてきました。あの時の粗末でひもじかったことを思うと、今現在、元気でいられるということはたいしたものだなあと思えます。

衣服は、母親の着物などを直した手製のものを着ていました。いまだき考えられないと思いますが、ほころんで穴が開いたりすると継当てをしました。ひじだの膝だの、力がかかつて破

れやすいところには継当てがされていて、そういうものを着ていても普通で、誰一人笑う人はいなかったです。粗末な服であっても丁寧な何度もつくろいながら大事に大事に着ていました。物を大切にしていた時代でした。

洗濯はもちろん機械なんかありません。手であらいの上でこすって、石けんなんか十分ありませんからほとんど水洗いです。下着なども毎日取り換えるほどのゆとりはありませんでした。

食べ物の話ですが、病気にでもならなければ、卵などは食べられませんでした。指をくわえて見ていたことがあります。

少し敷地があつたので畑を作って、トウモロコシを作ったのですが、ある朝見たら、1本もない。道を通りすがりながら失敬していった人がいたのです。食べ物にはひもじい思いをしました。

家の中などの電気製品などは、ラジオが1台あるくらいでした。足がパタンとたためる丸いお膳、ちゃぶ台は、ご飯の時も使うし、3人ぐらい向かい合って机にもなりました。一生懸命勉強した覚えがあります。今でもそのちゃぶ台を実家では残してあり、何かで集まった時に必ず出して、「これでご飯食べたんだからな」と父親が言ったりしたことが、何回かありました。毎晩空襲があるので、布団の頭のところには

防空頭巾、学用品、自分の大切なものを必ず枕元に並べておいて空襲に備えていました。

兄弟が多かったので、一人や二人だけ特別扱いはしないと常に言われておりました。学校も遠くにわざわざ下駄減らしに通うことはさせない、すぐ近くに学校があるんだからそこへ行け、という強い押しつけをされ、できないなりに一生懸命頑張つて、近くの女学校の入学許可が来た時には家中で喜びました。おめでどうと母親がさつま芋をパンになんかして、お祝いをしてもらった思い出もあります。

●女学生とはいえ勉強などしてられない日々

女学校に入った時に、上級生たちは中島飛行場へ飛行機の部品づくりなどに行っていました。私たちは学校に残つて農園を作ったりしました。防空壕が校庭の端の木の下にずーっとあつたのですが、それは父兄が作ってくれました。護国神社のちよつと先に小高い山がありました。その山の開墾をなるべく持つたことがない。鍬やスコップなどを持って、1週間ぐらい通いました。食べ物も十分に食べられないうえ、慣れない力仕事で大変困つたものです。それでもいくらかお役に立つのだろうということでも我慢しました。

しかし、なんのために学校に入学したのかわからなかった。教師たちも軍服を着た先生たち

です。教練みたいなマラソンとか体力作りで、ナギナタだの、竹やりの練習などで落ち着いた毎日の学習などほとんどできませんでした。それが悔しくて、何のために学校に入ったのかわからず、早く戦争は止めてもらいたいと願う毎日でしたが、その頃はそんなことは大きな声では決して言えません。

やつと昭和20年の8月15日、終戦。天皇の玉音放送で無条件降伏だとわかつたんです。ラジオの機械もあまりよくなかつたかもしれません。よく聞き取れず、先生の後からの説明で戦争に負けたということがわかつた。負けてよかつたといふ中で思った人もいたと思います。

戦時中、我慢の連続だったが家族が無事に生活できたということが、とてもありがたかつたと思います。

高校途中で学生制度が変わり、編入試験をしなければならず、結局通算6年間同じ高校に通いました。戦争で多くの人たちが犠牲になつていて、それを考えると、戦争は絶対してはならない、それだけは願いたいと思います。